曖昧な輪郭線の中で――アンシャン・レジーム期における雲の変容

村山雄紀（日本学術振興会）

本発表はアンシャン・レジーム期における雲のイメージの変遷を追跡することを目的とする。ユベール・ダミッシュが『雲の理論』で述べたように、雲はルネサンスまでは宗教的意味を強くもち、神学的な現れを象徴していた。たとえばマンテーニャ《夫婦の間》の穹窿に描かれた雲は、天使たちに囲まれた中央に配置され、神学的存在の顕現として機能している。しかしながら 17 世紀になると、雲は物語画や宗教画の副次的要素から、風俗画や風景画における一次的要素へと変化する。この傾向はフランドルやオランダの風景画に顕著であり、雲が自然現象として描かれるようになったためである。プッサンやロランも印象的な雲を描いているが、彼らの作品では神話的含意が残されている。アニュシュカ・ヴァサックによれば、フランスにおいて雲の世俗化、つまり物語的叙述からの自立が実現するのはアンシャン・レジーム後期になってからであった。ここで「18 世紀」ではなく「アンシャン・レジーム期」という語を使うのは、こうした変化が単なる様式の移行ではなく、旧体制下の宗教的・政治的秩序と芸術表象の関係に深く結びついていたことを示すためである。雲の曖昧な輪郭線は絶対王政における秩序や神学的象徴の揺らぎと連動しており、制度的・象徴的な境界の解体を象徴する時代精神の徴候でもあった。雲はその不定形性によって、アンシャン・レジームの終焉を予兆する視覚的メタファーとして機能していたのである。

本発表では雲の世俗化に関して、二つの系譜を提示する。一つ目は雲が天上の象徴から離れ、地上の快楽と結びついて描かれるようになった点である。例えば、ヴァトーの《シテール島の巡礼》では、曖昧にぼかされた雲の輪郭が人物や樹木と混じり合い、各要素が溶け合うことで快楽の雰囲気が表現されている。フラゴナールの《水浴の女性たち》や《ぶらんこ》でも、雲は水飛沫や樹木、身体と溶け合い、官能的な情景を生み出している。二つ目はヴェルネやルーテルヴールの風景画にみられるように、雲の自然描写が前景化し、宗教的・神話的意味から解放されている点である。彼らの雲は自然観察に基づく写実的描写であり、ディドロはその曖昧な揺らぎに価値を見出していた。このように自然現象としての雲の描写が第二の系譜を形成している。

以上のように、本発表ではアンシャン・レジーム期における雲の表現の変化を、世俗化の過程として二つの道筋に整理する。すなわち、雲が神学的・物語的機能から解放され、地上の快楽や官能と結びついた系譜と、雲自体が自然現象として自立し、視覚的リアリズムを担うようになった系譜である。両者に共通するのは、輪郭の曖昧さが画面全体に柔らかく統一された印象を与え、雲が天と地、抽象と具体、神聖と世俗を媒介することにある。この点を明らかにすることが本発表の目的である。